

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル:「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」(平成 26 年度第 3 回研究会)

日時:平成 27 年 3 月 28 日(土曜日)午後 2 時より午後 7 時

場所:東京外国語大学本郷サテライト 5 階セミナールーム

1. 野々垣篤 (AA 研共同研究員、愛知工業大学)

「インド建築の装飾モチーフと人々の思いとの関係について」

本報告は前後半の 2 部構成である。前半 1. ではインドにおける建築に関わる職能組織について、特に伝統的な建築書およびその相当物の文献およびそうした文献研究の調査に基づく報告である。後半 2. ではインド建築をデザインした当時の人々の思い(意図)を、建築装飾、特に柱に見られるモチーフとその配列から読み取ろうとした研究の一端を紹介し、装飾モチーフとそれらに込められた思いを、特にプールナ・ガタに着目して、建築書含めたいくらかの文献記述を紹介し、議論しようとしたものである。

1. 文献に見られる「建築」に関わる人々

1) 様々なインドの建築書相当物

5～6 世紀に最初のもものが成立した *Manasara*、11 世紀に成立した *Samarangana Sutradhara*、15 世紀に成立した *Rajavallabha* といった建築書の記述等に建築に関わる記述及び建築を造る人々の記述が見られる。

2) 「建築を造る人々」に関わる記述

ここでは、建築を造る人々(建築チーム)の伝統に関わる記述を文献から報告する。

① Walker, B. *Hindu World* からの記述:「Architecture」の項より^{※1}

シュタパティ (sthapati=棟梁) スートラ・グラヒーシ (sutra-grahini=製図工) レパカ (lepaka=石工)、スートラ・ダッラ (sutra-dhara=大工) の 4 つの職能が建築を造る。

② 建築書 *Manasara*、*Mayamata* に見られる伝統的な建築組織^{※2}

シュタパティ (建築家:すべてのデザインを概念化する存在)、スートラ・グラヒーシ (測量士相当、すべての部分の寸法(比例)を決める;理論(建築家のコンセプト)と実践をつなげる存在)、タクシャカ (takshaka=大工または彫刻家;決められた寸法・デザインにあわせ、材料を仕上げる存在)、ヴァルダキ (vardhaki=絵画・着色を行う存在)

③ 建築書 *Samarangana Sutradhara* に見られる伝統的な建築組織^{※3}

シュタパティ (建築家、ただし単なるコンセプトを固めるのみではなく、実践的な技能についての知識を必要とする存在)、スートラ・グラヒーシ (シュタパティと職人達をつなぐ存在)、そして数多くの職人達

④ 建築書 *Rajavallabha* に見られる伝統的な建築組織^{※4}

スートラ・ダッラ及び職人達の記述。シュタパティの存在が薄れ、実際の建設もシュタパティ無しで実施される。

以上のことから、建築書の記述を通して、建築を造る組織やそれぞれの役割が時代によって大きく変化していたことが報告できる。伝統的にはいわゆる「カースト」のように4つの「階層」が語られるが、実際には数多くの「ジャーティ」のような細かな職能が存在していることは予想できる。同じように、シュタパティ自体は儀式上重要な存在ではあるが、スートラ・グラールヒンそして後になればスートラ・ダッラのような「階層」が具体的な建設作業を進めていたことも仮定可能であり、だからこそ *Rajavallabha* の成立した時代においてはシュタパティの存在が記述からなくなってしまったのではないかと、ということも考え得る。一方で、たとえば、同じスートラ・ダッラと肩書きがされていても、実際に担当する作業も変遷が見られる。そうした肩書きと職能の時代的な変遷を追うことも可能かも知れない。そうした変化から、そうした建築集団組織のみならず、インドにおける建築そのものの文化的な位置づけの変化を追うことが可能かも知れない。

2. インド建築の装飾と空間デザイン

後半では、まず、発表者のこれまで研究の原点の一つである、インドの仏教石窟の形態に関する研究のうち、エローラ仏教石窟で使われている柱のデザインから、そうした石窟建築に込められた、それらを造った人々の意図に焦点を当てようとした。エローラ仏教石窟に見られる柱のデザインを特徴的な3つのモチーフで分析し、石窟という形式が本来もつ「もの」の実現意図と「空間」の実現意図との曖昧さを明確にしようとした研究成果を示した。次に、そのデザイン・モチーフとして表れた「満たされた壺」についての文献^{※5}からの記述を報告し、議論した。

おわりにー今後の課題ー

「建築職人集団」に注目して文献調査を進めたが、結果としてより一般的な文献内容報告に留まった。建築書も理想ではあるが、実際の建築職人集団を語るものではなかった。この目的を果たすためには、より具体的な建築の建設事例を一つずつ検討し、積み上げる必要がある。

註

※1 Walker, B., *Hindu World An Encyclopedic Survey of Hinduism*, New Delhi, 1983

※2 Chakravarti, *Indian Architectural Theory*, Delhi, 1999

※3 *ibid.*

※4 *ibid.*

※5 Agrawala, V.S., *Studies in Indian Art*, Varanasi, 1965 及び矢野道雄・杉田瑞枝訳註『占術大集成』東洋文庫 589、平凡社、1995 及び小谷汪之「第1章 王権の儀礼と在地社会の儀礼ーヒンドゥー文化小論」『インド社会・文化史論「伝統」社会から植民地的近代へ』明石書店、2010 等

2. 真下裕之（AA 研共同研究員、神戸大学）

「マンサブ制度における人的結合の一側面：ムガル帝国の乳兄弟」

ムガル帝国の国家制度に関しては、歴史研究上の課題がなお多数残されている。マンサブ制度もその例外ではない。この制度は、一元的数値によって表示される位階（マンサブ）を帝国人士に対して君主が授与し、それを給与算定上の変数としたものである。マンサブの数値は一元的なものから復元的なものになっていくとおりの変動を遂げるが、この制度が帝国人事の根幹をなしていたこと自体に議論の余地はない。マンサブ制度はこの点において、まずは俸給制度であったといえる。

一方、一定数値以上のマンサブの保有者（マンサブダール）はアミールと呼ばれて別格に扱われたし、有力人士の子弟はしばしばその働きとは無関係にマンサブを授与された。このような一種の序列意識と特権意識に根ざした運用は、この制度が貴族制度でもあったことを示している。さらにマンサブが、マンサブダールの給与に対応した軍事的義務を含意して表示されたことは、この制度に軍事制度としての側面をも与えている。マンサブ制度はこのような多義性ゆえ、多角的な検討を要する研究課題である。

マンサブは君主によって授与されたから、マンサブ制度における人的結合は、まずマンサブダールと君主との間において、多様かつ重要な諸相を呈したはずである。その諸相の現象は、血の紐帯（父子関係、婚姻関係）、乳の紐帯（乳母、乳母夫、乳兄弟としての関係）、家族の擬制、師弟の擬制などさまざまあり、人士の規範意識もまた帝国社会における統合のイデオロギーとして、詳細な検討を要する研究課題である。

本報告はこのうち、乳の紐帯に焦点を当てるものである。まず王子に対する乳母の授乳関係と周辺の間人関係についての用語・概念を整理した上で、乳の紐帯に関する同時代の意識と行動を確認する。そのうえで、バーブルからアウラングゼーブに至る乳兄弟とその一族の構成員を史料から網羅するとともに、当該の人物情報を系図によって視覚化する。以上の情報に整理・観察を加え、乳母の家系、乳母夫の家系のいずれも、同時代の記録に値する名門家系の出身ではないことが見出される。その上で、帝室との乳兄弟関係が当事者たちにとって持った意味、複数の乳母・乳兄弟家系が存する意味、乳兄弟と君主の関係性とその変化について検討を加える。さらに乳兄弟たちの生き方が、王子の朋輩としての側面に加え、いかなる経歴の特性を有したかについても検討を加え、いずれにせよマンサブダールとして帝国の制度に編成されていたことを確認する。その上で、乳兄弟たちの子孫の消長についても考察し、乳兄弟家系がマンサブダール制度下の貴族家系として、ささやかな存続を果たしていたことを確認する。

3. 総合討論（全員）

3年にわたる本研究課題を終えるにあたって、成果と課題を総括する討論を行い、次のような論点を確認した。

第一に、多種多様な集団や社会的結合を取り上げた研究会報告からは、インド社会における社会的関係の多様性・多元性、さらには地域性があらためて再認識された。

第二に、「集団」がもつある種の弱さも、多くの報告から浮かび上がってきた。集団とし

での恒常性や永続性を担保する基盤（共有財産など）をほとんど持たない集団、「集団」というよりも「拡充されたネットワーク」というべきものを、インド史における社会集団・組織のひとつの典型的なあり方として想定することができかもしれない。活動・行為の単位として集団・ネットワーク・個人が併存する、あるいは、状況に応じて入れ替わるインド的社会編成の特徴が問われるべきであろう。

第三に、第二の点と表面的には矛盾するが、研究課題実施を通じてあらためて確認されたのは、「集団」が社会を構成するという考え・発想が史料となるテキストに根強くあるということである。さまざまな集団概念や集合的範疇は、当事者が自ら生きる現実社会を全体として見通し、そのなかで有意義な生を生きるのに必要な道具であったともいえ、その意味で現実の一部であった。「現実」の社会的結合のあり方と、テキスト中の集団をめぐる言説・表象の双方を視野におさめ、両者の動的な関係性を踏まえたインド歴史社会理解が求められる。